

シベリア抑留記

愛知県 久野 春 男

出生から入隊まで

私は大正十二（一九二三）年一月十五日、名古屋市東区田代町鹿子殿にて出生いたしました。

昭和十二（一九三七）年三月、名古屋市立田代尋常高等小学校高等科二年を卒業して、家業（農業）に従事しましたが、その後、昭和十四年四月、名古屋千種郵便局に就職して入隊まで勤務しました。

昭和十八年十二月、徴兵検査を受けて第一乙種に合格した。昭和十九年一月十七日に現地入営のため、広島東練兵場に集合し、下関港を出港して釜山港に上陸した。

昭和十九年一月二十三日、牡丹江省興源鎮の関東軍機械化工兵第十二連隊に入隊。その後は満州国内の各地を転戦した。

シベリア抑留生活

昭和二十年八月十五日、横道河子において終戦を迎え、ソ連軍の武装解除を受けた。我々の部隊は、ソ連兵監視の下に横道河子から拉古集合場に移動を命ぜられ、苦しい辛い行軍で長い抑留生活が始まることになった。途中戦友の屍を乗り越え、合掌しながら苦難の末、拉古に到着いたしました。

昭和二十年九月中旬、我々の部隊は千人単位に編成され、目的地も知らないまま出発することになった。「お前たちは、これから東京ダモイ」とのソ連兵の言動にまどわされて……。ソ満国境まで約三百キロの長い道程を日夜風雨にさらされ、祖国日本に帰ることを信じながら約一カ月も歩き続けて、国境の街グロデコ（ソ連領）に到着しました。皇軍と称したかつての関東軍の精鋭達も、見ても哀れな敗残兵の群れと化していた。

グロデコから貨物列車に乗せられて北上、着いたところはハバロフスク。駅から郊外の山の中を五時間位歩いたところに、鉄条網で厳重に囲まれ

たラーゲリ（収容所）があった。ラーゲリに入ると、ソ連将校から命令があった。曰く「船が入るまでここで待機する」。これは真つ赤な嘘で、待てど暮らせど三年間、迎への船は来ませんでした。いよいよ本格的な収容所の抑留生活が始まることになった。

広い収容所は四隅に高く組み立てられた櫓があつて、ソ連兵が日夜機関銃を持って監視をしているので、脱走が成功することは全く考えられませんでした。

シベリアにおける初めての冬。食糧不足で栄養失調になる者が多く、零下三〇度の酷寒、寒風の吹く中を毎日の重労働で体力を失つて、精神的にも限界に達し、生きる気力を失つて誰かが毎日死んでいきました。

こんなこともありました。朝になつても隣に寝ていた戦友が起きないので、声をかけて揺り起しても全く動く気配もなく既に息絶えて死んでいた。明日は我が身かと、常に死の恐怖を背負つての悲

惨な抑留生活でした。

我々日本人に与えられた仕事は森林の伐採作業が主なもので、その他、農業や道路建設の作業等にもかり出されましたが、いずれも厳しいノルマが課せられ「ダワイ・ダワイ」とソ連兵の怒声がせき立てられながらの作業の辛さ、苦しさは筆舌に尽くし難いものであつた。冬期の労働は、伐採した材木をトラックや貨物列車に積み込む作業に変わりました。ダモイの夢を見ながら、極寒のシベリアの大地で、飢えと重労働を耐えしのんだ抑留生活が三年間も続いたのであります。

私も一時期、栄養失調にかかつて病に倒れましたが、病魔を克服し幸運にも全快し、生きて内地に帰還することができました。

昭和二十三年十月二十日、信濃丸でナホトカを出港して十月二十三日舞鶴港に上陸し、五年ぶりに内地の土を踏んで復員を果たしました。

今こうして自分の人生を振り返ると、初年兵時代の苦しい軍隊生活と三年余りのシベリア抑留生

活での過酷な労働の辛い思い出が時折りよみがえつてきます。

亡き戦友のご冥福を心よりお祈りします。

沈黙の屈辱と抑留

滋賀県 川 清一

復員後の経歴

昭和二十三年十一月 千種郵便局復職
昭和二十四年一月 名古屋通信局出向
昭和三十七年四月 名古屋猫洞郵便局長拝命
昭和六十三年三月 定年退職（六十五歳）
現在、町内会の会計、氏子総代

昭和二十（一九四五）年三月五日、私は召集を受け広島に集結後、三月十五日に満州・黒龍江省琿琿県朝水、満州第六国境守備隊に現地入隊した。兵舎は煉瓦造りに、ガラス窓、板張りの床、被服は洗い晒した軍衣股、靴は革靴と一応整っており、内務班は厳しい規則で拘束されていた。

原隊では、一部の兵しかおらず、殆どは陣地で戦車壕や散兵壕掘りに従事していた。私も入隊後、原隊を離れて近くの「二站」の陣地で陣地構築に従事していたが、開戦時には原隊に復帰していた。

八月九日、ソ連軍が突如、国境を超えて攻撃を開始してきた。朝水陣地でも猛烈な戦闘機の機銃掃射を受け、隊員はすかさず軍装を整えて待機した。前線では一部のソ連軍が威力搜索的に進入して監視所を次々と陥落させたため、火を放って後